

砂の駅

太田省吾

舞台

直径10 mの円（円は鉄板でくっきりと枠どられている）

円の中は砂。

円の外は黒。

（登場する旅人たちは、それぞれの方角からやってきてそれぞれの方向へ去っていく。つまり、特定の道は存在せず、したがって円の外はただ一様の広がり）

構成

プロローグ

1 〈砂山と小枝〉

2 〈食卓とダンス〉

3 〈砂と叫び〉

4 〈蝶の行方〉

5 〈夜の水〉

エピローグ

女	女	女	女	女	女	男	男	男	男	男	男	登場人物
6	5	4	3	2	1	5	4	3	3	2	1	
(S.6)	(S.5)	(S.4)	(S.3)	(S.2)	(S.1)	(S.5)	(S.4)	(S.3)	(S.3)	(S.2)	(S.1)	

プロローグ

この作品は、(どのプロジェクトもそうだが)多くの偶然性を抱えている。多国籍の俳優たちの集まりというところに働いている偶然性は、少なくとも通常のプロジェクトより強く意識させられる。

ところで、われわれの生には数知れぬ偶然性が働いていて、それはわれわれの存在の基本を形成している。(無根拠性、生の時間の長くない有限性とともに)
その働き、力は無視する以外に手はないのだろうか。

それは、表現において(殊に演劇表現において)〈社会〉を生きる者しか扱えないのかという問いへ通じる問いである。

むしろ、〈社会的存在〉としてのわれわれと〈生命的存在〉としてのわれわれを二元的に扱うことはできないだろう。しかし〈生命的存在〉の側面は、往々にして表現の外へ置かれる。

〈遅いテンポと沈黙〉という形式は、その表現の在り方への疑問から発したものであり、この形式を前提としているこの作品はこのプロジェクト自体の抱える偶然性を導入部に加える必要を感じ、まず集まった俳優たちの姿を見せることから始めることとした。

全編を通して、人と人との出会いと別れという偶然の力の濃く働く、その瞬間の深みは、特にこの劇の形式(遅いテンポと沈黙)の力が発揮されなければならないところだと思われる。

俳優たち、一人一人 砂を踏んであらわれる
砂の円へ目をやり 砂の外へ

二人の俳優 円の外に並ぶ

中から一人 窓枠を抱えた俳優が

円の中央へ出 円の中央へ窓枠を立てる

俳優たち 窓枠の奥へ集まり外を眺める

(設定されたフィクションの空間としての、砂の円と客席を)

俳優たち 窓枠からはなれ それぞれの時間を過ごす

俳優たちの動き 次第に遅くなり

砂の円は 砂の駅に様相を変えていく

俳優たち 再び円の外から砂の駅を眺め

姿を消していく

Ⅰ 〈砂山と小枝〉

旅の男が一人(男Ⅰ)、無人の砂の駅へさしかかる

男Ⅰ あたりへ目をやり やってきた道へ

遠い目を向ける

男一 荷物を下し 腰を下す

男一の目 広い空間へ向けられる

男一 荷物を引きよせようと 手をかける

その動き 内的時間によって 止まる

男一の内的時間 経過する

やがて 顔が動き 後方へ

老いた女(女一)が一人 砂の駅へ

老女 荷物を置き 寄りかかるように

砂へ腰を下す

男一の目 老女へ

老女の手 砂に触れる

老女 砂を集め 砂の小山を作る

男一 老女と砂山へ近づく

男一 老女となりへ 砂の山をつくる

二人 目を合わせ 二人の小山を眺める

二人の背後に若い女（女2）
女2 二人をうかがう

女2 老女のとなりへ腰を下し
二人の小山と同様の 小山をつくる

女2 二人へ目をやる
三人 互いに小山へ目をやる

男1 立ち上り 女2へ
近づき 腰を下す

女2 男1の行動を探る
男1 女2の砂山を かたちよく整える
二人 見合う（老女一人）

老女 二人を置いて 遠い目

老女 旅の道へ

男1と女2 老女を見送り

二人になった 砂の駅

女2 立ち上り 男1から距離をとる

女2 男1の目と出会う

男1 女2へ近づく

女2 距離をとる

男1 距離を縮める

追いつめられた 女2

手にしていた 小枝を砂へ

女2 砂へ円を描き 円の中へ

二人の間に 砂に描かれた円

男1 線の前で 動きを止める

男1の手 自身の目へ

(線の見えない目となる)

男1 片方の手を女へ 近づける

女2 身をかわず

男1 線を越えて 手をのばす

女2 円の中で 男1の手につかまる
二人の動き 止る

女2の手 自身の目へ

盲目の二人の身体 円の中で 触れ合う

円の外に出た 二人の盲
砂の駅で遊ぶ

二人の触れ合い やむ
動かなくなった 二人の身体

女2 後手に 小枝をかざす

男1 小枝へ 手をのばす

小枝 女から男へ

女2 荷物へ

荷物を手にし 歩きはじめる

男1 女2へ目を

男1 女2を追う

女2 男1へ目を向ける

女2 目を旅の方向へ

男1の目

女2の 動きを止めた背中へ

女2の背中 旅の方向へ 歩み出す

男1 背中を見送り

無人となった砂の駅から

自らの旅の方向へ 目を向け 去っていく

2 へ食卓とダンス

女3 砂の駅を去っていく男1の

後姿へ 目をやりながら やってくる

女3 あたりを遠く 見まわし

荷物を そして腰を 砂の上へ

女3の目に 回想の時

女3を包む タンゴの中

テーブルを背にした男(男2)と

椅子を肩にかけた女(女4)が 砂の駅へ

二人 女3の目の存在に 気づき

二人 砂の駅の一隅に テーブルと椅子を設える

二人 コートを脱ぎ 椅子に腰を下し

バスケットから パンと水を取出し

二人の食事

女3の目の中で

二人の生活の儀式

男の手に儀式のしるし 赤いスカーフ

男2 女4の首へスカーフをかける

女3 二人を見ている

二人 水を飲み パンを口にする

女4 自分たちを見ている女3へ目をやる

女4の目に影

女4 立ち上り 女3へ歩み寄る

女4 女3の首へ 赤いスカーフ

女3 スカーフの意味を探り 女4を見る

女4の目 男2の方へ

女3の目 男2と食卓の方へ

女3 二人を見ながら（自分に与えられた役を探りながら）
食卓 男2の方へ

女3 食卓と男2を前に 椅子へ

女4の目の中で 食卓の二人

男2 水を女3と自分のコップへつぐ

先の二人と同じ仕草で 水を飲む

パンを口に入れながら 見合う二人

二人の食事を見た 女4の目(己れの日常の反芻)

一人の目で 立ち上がり 砂の上を歩く

砂の上へ腰を下し 靴を脱ぐ 女4

女4の背後に 男(男3)の姿

男2と女3の目 男3へ

男3 遠くを見やりながら

女4のとなりへ 腰を下す

男3 女4の脱いだ靴へ目をやり
靴を脱ぎ 女4の靴と並べる

女4 男3の動作を見

男の意図を探る

二人 目を合わせる

食卓の男2 立ち上る

女3 見送る

男2 二人の隣へ腰を下し
靴を脱ぎ 並べる

砂の上に 三足の靴

三足の靴を眺める 裸足の三人

三人の目が ゆるむ

男2 二人の背後をまわり 男3のとなりへ

女3が 三人の背後へ

女3 三人のとなりへ腰を下し 靴を脱ぐ

四足の靴と裸足の四人

四人の顔に笑み

男3 腰を下す位置を変える

四人の関係 構図を変える

四人 それぞれ位置を変え

関係構図の変化を 楽しむ

(男女二対二 男一対男女三など)

ながい遊びのうち

女二対男二という図となり 動かなくなる

やがて 男たちが 行動を起こす

男二人いっしょに 女二人の方へ 尻で近寄る

女二人 それぞれに応じ 男たちの方へ

砂の上を 尻で進む 四人

やがて 四人 一つの塊になる

身体の押しつけ合いが 心地よい

四つの身体 揺れている

揺れが ぶつかり合いに変化

四つの身体が ケンカを起す

ぶつかり合う 四つの身体

男2の目に変化

遠い一点へ目をやり 三人から離れる 男3

砂の中から 起き上る 三人

男2に近づく

四人の顔 男3の目の方向へ

男2の目 旅立ちへ

遊びをつづけようとする 女3

砂の上にごろがり 三人を誘う



三人 女3を見る

男2 砂の上の靴へ手をのばす

女3 男3の靴をおさえる

男2と女3 見合う

女3の手 男2の靴から離れる

男3 靴を手にはぶら下げ 女3へ手をひろげ

踊りのポーズ

女3 男3の誘いに応じる

二人の身体 近寄り ダンス

二人 わずかな時を踊る

二人を見ながら 男2と女4 食卓へ

男3女3へ 旅を共にする誘い

女3 男3から遠ざかり 荷物を取り 己の道へ

男2と女4 食卓と椅子を 背と肩にして
二人の道へ去っていく
一人 砂の上に残った男3

3 へ砂と叫びく

砂の上で 背をこごめた男3の背後に
女(女5)の姿

女5 背後から 警戒の目

立ち上った男3の 荷物へ向かう目に 女5

警戒の目を 男へ向ける女
なぜと 問いの目を向ける男

見合った時間が
男3の歩み出しによって溶ける

男3 己の道へ

見送った女の背

振り返り 砂へ向けられた

女5の 孤独な目

女5 しゃがみ 足元の砂に触れる

砂をつかみ 手の砂を

糸の細さで落とす 女5の まっすぐに立った姿

横に強く振られる 女の首

黒い目の身体

固く 小さく 砂へ

女5の目 空へ

空へ向って 強く開かれる口（叫びー無声）

閉じていく 口

めずらしいものでも見つけたように

己の身体を眺める 女5の目

再び空へ (単独の私)

空へ向けた 目の端で
気配を感じとる 女5

4 へ蝶の行方

男(男5)と女(女6)が 砂の駅へ
女5の目 二人の旅の姿に 夫婦を見る
気おされるように、二人から距離をおく

男5と女6
二人で女5へ 目を向ける

女5 距離をとりつづけ
砂の駅を 去っていく

男5 (夫) 砂に 腰を下す
女6 (妻) そのとなりへ

夫 水筒の水

飲み 水筒を 妻へ

妻 手を出さない

妻の手 身体に触れ

やがて 手が胸へ

ブラジャーが引き出され 砂の上へ

妻 砂の上に 両脚をひろげ

目を 夫へ

夫 ひろげられた脚を見る

妻の手 ブラジャーを もてあそぶ

ひっぱられるブラジャー

妻の目 ひものようにのびた ブラジャーを眺める

夫の目 ブラジャーをいじる 妻へ

妻の手 ブラジャーで あやとり

つくられた あやとりのかたちを
夫へ

夫 あやとりに応じ かたちを変え
妻へ

妻 あやとりで
ブラジャーの蝶々をつくる

蝶々が 飛んで
己の足先へとまる

蝶々が 飛んで 夫の方へ

夫の 靴の爪先へ
靴から 夫の身体へ

夫 荷物から 傘をとりだす

傘の先に

蝶々が とまる

傘で 蝶々と遊ぶ夫

遊びから 身を引く 妻

妻の腕 遊ぶ夫の脚を 抱く

砂の上に

二つの身体の塊

小さな塊がへなげを追って動く

塊が解け

身を起す 夫の目にへなげ

夫の目に 見られる妻

妻の手 身じまいへ

妻の顔 夫へ

二人の顔に 笑みがもれる

二人の顔 それぞれの方向へ

一人一人の時がすぎる

妻 傘を閉じ 蝶々をかたづけ
荷物をもちあげる

二人

砂の上で 空へ目をやる
星でも 探しているのか

二人を 遠く 背後から見ている男（男5）

男の目に気づく 二人
旅の道へ

5 〈夜の水〉

二人を見送る男（男4）
二人の目を向けていた 空へ目をやる

へなにを〜という 男の目
答えは返ってこない

男 砂の駅を 見まわす
場を決め 砂をならし
砂のベッドを設える

砂の枕に ハンカチをひろげ
荷物から 毛布を取出し
ベッドに腰を下し
靴を脱ごうと
靴へのばした

手が止り 目が止り
回想の時

靴へもどる目

靴が脱がされ 砂の上へ
靴が置かれる

手が止り 目が止る
再び 回想の時

男の顔に 笑み
男の身体 揺れる

男の身体の 揺れが止み
男の顔の 笑みが止み

身体がベッドへ

男 毛布を引っぱり
毛布の中へ

砂の駅は 闇を迎える

闇の中へ
少女の白い姿 浮かび出る

少女 砂の上を 歩む
着衣をとりながら

砂の駅に 水が滲み出す

男5 水に気づき 身を起す

少女 水を踏みながら
着衣を脱ぎ 歩んでいく

ベッドにも 水が侵入し

男5 荷物を持って 立ち上る

水が 砂の駅をおおっていく

少女の白い下着 闇の中へ
消えていく

水面となった 砂の駅

エピソード

砂の駅の円の外
闇の中に 人々の姿

登場人物たち
水に浸された 砂の駅を
遠く眺める



底本

『太田省吾 劇テキスト集(全)』

二〇〇七年九月十四日 初版発行

早月堂書房